慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中高年(者)の生活環境と生活保障：社会学的視覚に立って
Sub Title	Economic Life Securities of Elderly Men
Author	庭田, 範秋(Niwata, Noriaki)
Publisher	
Publication year	1987
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.30, No.2 (1987. 6) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19870625-04054207

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
30 巻 2 号
1987 年 6 月

中高年(者)の生活環境と生活保障

——社会学的視角に立って——

庭 田 範 秋

1 “熟年”と“実年”の比較

わが国で人口構成の高齢化が注目され，論議の俎上に乗せられだした頃から，熟年という言葉が流行りだした。かの電通という会社がこの言葉を作り，もっぱら使用したことより始まるとされている。またたく間に世上に流布し，みる間に強く定着した。人によっては熟年という言葉を嫌う場合もあった。熟柿を思いだしたり，半熟玉子を想像するというのである。発音するとジュクネンであるから，濁音が含まれて，どうにも弾まないのである。ただ熟という字はけっして悪い意味のものでなく，例えば「火を加えられた食物が美味しく煮上るさま」とか，「果物が太陽の熱で芳醇にうれる状態」とされている。この熟の語義をもとにして熟年を考えてみると，どうやら人生の収穫期ということになる。電通が使用する際には，45～65歳と幅広く捉えているが，これは〝働き盛り〟を取り込むためと，そもそもこの働き盛りが，人により，職業によってくくまちまちであるからであろう。早く老けてしまう人もいるし，最後まで生き生きとしている者もあるであろう。概してスポーツ人は老いが早く，芸術家はいつまでも若いとされている。

熟年は，かかる意味で人生の良い状態を示し，含めてもいるから，経済的にも貧乏なわけがなく，むしろ豊かな状況にあるとみることができる。そもそもわが国で高齢者とか老人とかというと，すぐに貧困者を想像しがちであるが，これは一種の既成概念，悪い意味の伝説・神話である。本当は現今の高齢者はそれほどみじめではないはずである。だからといって今後も末長くみじめにはならないとは云いきれないが。熟年という言葉は“みじめ”を拭い消すにはけだし適切な文言であった。とはいうものの，熟年に決定的に不足しているものが二つある。一は持ち時間である。なんといっても高齢または高齢の入口にあるから，その後の人生の時間の量は，多いというわけにはいかないのである。体力も下り坂となろうから，これらの諸条件の総合の上に，もう一つの別の不

足が生じてしまう。それが可能性の減少となる。新たに事を仕上げたり，別の業を成し上げるといった大きな可能性は欠落してくる。ただ今までのことはこの時期に成熟して，成果をもたらす場合が多いであろう。収穫期とか完成期，またはそれに向けての最短距離にある時期といえるであろう。

この熟年に対し，先般，厚生省が実年・實年という対抗用語を設定して，公示した。こちらも発音すればジツネンで，濁音が含まれてしまっていて，いささか明るさや跳ねる印象には遠い。だがこれとてもけっして悪い用語ではない。そもそも“實”の字義は「家の中に金銀財宝の充満すること」「物がいっぱいになって，しっかりとミのあること」などである。ただしアフルル意はなしとあり，それならば実年がいかに充満していたとしても，溢れるほどではないということで，まことに実状を上手に示しえて妙であろう。

熟年も実年も，どちらも似たような意味内容で大差はないが，成熟などという文言もあることから，熟年の方が若干ながら“動き”が感じられるであろう。それに対して実年は木の枝や草の先端にミが定着している様子をも示して，シッカリの感はあるが，動きを思わせることは少ないであろう。いずれにしろ両者とも人生の頂点に立ち，成果の集約に向けて歩んでいる時期ということで，きわめて重要な段階に身を置いているのである。しかし同時に絶対に失敗の許されない立場にもある。ほとんど取り返しもつかなければ，再起もおぼつかないからである。そして人生の経験は積み上げられてあり，人間関係も豊富で幅広く，万事に調整力が生かしえて，これらの諸点で若者をはるかに凌ぐ。結局，若者と熟年・実年と呼ばれる中高年の間には，一方が豊富に持っているものが他方では不足し，その他方が十分に身に付けているものが，別の相手方では欠落しがちな事情下にあり，ここで若者と中高年と上手に組み合わされて協調関係が保てさえすれば，社会も生産の場も順調に動いていくものと思われる。思われるだけでは駄目で，是非ともこのように導いていかなければならぬことなのである。

熟年と実年の二つの用語が入り乱れて使われるくらいならば，むしろ本来の中高年を生かして用いる方がよいのではないか。ではそこで老人・老年・老齢という表現をどうするかである。さすがに“老”という字は有難くない。人と毛と匕の合字であって，70歳以上の年寄りのことをいうのである。まず匕は，年寄りて腰曲がり，髪白くなりて，まったくその形の変わる様子を表わしている。老とは，年老いて毛の化(かわ)りし人という義なのであって，転じて老人の尊称となった。曲礼に「三十曰ㇾ壯，四十曰ㇾ強，五十曰ㇾ艾，六十曰ㇾ耆，七十曰ㇾ老，八十九十曰ㇾ耄，百年曰ㇾ期」と。昔は人々が早死にした割には，老がおそく設定されていた。農耕社会では，いつまでも農業という仕事には従事できたし，それに社会変革や環境変化，技術革新などのテンポがゆっくりであったために，いつまでも現職・現場に留まりえて，なかなか今様の老人扱いはされぬままに，尊敬を受ける老人にはなったのであった。現代のわが国では，老という字を使うのに少しく敏感すぎはしないだろうか。あまり度の過ぎた配慮をすることは，老に対して逆効果ということになろう。

2 中高年の生活設計と問題点

中高年は，そろそろ事を仕上げなければならない立場にあって，しかも持ち時間は少なく，体力・気力は下り坂，その上失敗は利かない状況にあるから，とりわけ行動に慎重を期する必要がある。さらに現在就労していて実際の仕事のおおかたを遂行している若者ならびに壮年者とは，十分なる連絡と調整を図っていかなければならないから，いわれるほど“独自性”や“特殊性”を発揮できないのである。社会内でも，地域内でも，企業にあっても家庭にあっても，複雑で微妙な立場に立たされ，置かれているのである。若者との対立をきたしたり，ポスト争いを展開したり，時代の進歩に対して保守化に流れてもならないのである。

わが国の熟年・実年の最高年齢層，高年後期，いわゆる大正二桁から昭和一桁にかけての年代層は，ことのほか困難な立場に置かれている。かれらは，戦中・戦後の経済的・社会的混乱期に人生の最盛期を窮迫状態に身を浸しつつ過したので，老後の生活準備が不十分にしかなされていないのが実状であろう。この点かれらより一時代前の人々の方が恵まれていよう。親孝行の美風は残っていたし，戦争の痛手も軽かったであろう。結局，当面の中高年向け対策としては，かれらの個人的老後準備の不足を公的努力・公的施策によって，どこまで埋め補ってやるかに問題は集約されてくるであろう。

ところでこれからの高齢化社会の到来を予想しての，個人個人のところでの生活設計はというと，その重点は，現職にあって比較的多くの収入のある若・中・壮年齢期のその収入の一部を，現職を離れたか，近く現職を離れるかの段階，そして当然に収入が減ってくるであろう時期に向けて，大きく，長期的構想のもとに“割り振る”行為とされるであろう。生涯間所得再配分行為であって，これを個人的見解と個人的努力で行ったのが，いわゆる生活設計となるのである。

生活設計，その中心的課題となる生涯間所得再配分とは，当然のことながら家計に“ゆとり”がなければできないもので，ではいうところのゆとりとはいかにして生ずるか。その方法の第一は，日常生活内での家計のやりくりに際し，支出される各貨幣のもたらす生活上の効用，有効度，もたらされる生活的充足感や満足度などが均等になるように，貨幣・金(かね)を割り振りつつ使用することである。そして第二は，生涯の各時期ごとの生活満足度・充足感等々がこれまた均等となるように配慮して，ここでも貨幣・金を再配分するのである。人生の一時期で豪盛に生活をし，別の時期で(とくに老境で)貧乏の生活を持った者よりも，各時期とも平均的な生活水準で過しえた者の方が，結局はより楽しくて，より豊かで，より有意義な人生となるのではないかと思えるのである。現代は波瀾万丈の生涯を評価する時代ではなく，安定的にして堅実な人生を尊重する世相なのである。同様に乱暴な生活姿勢は嫌悪され，安定的生活態度は好まれる。

昔といえども，生活設計はあるにはあった。それは潜在的・慣習的・惰性的なものではあったが。諸行事の社会内での展開につれ，昔からの仕来りにのっとり，各家庭の受け継がれた諸事項の上に，ゆるく，しかしそれなりに意味と意義を持って，とにかく生活の性格付けと方向付けはなされていた。これに対して最近の生活設計の好ましいあり方はというと，顕在的・合理的・意識的なそれといえよう。それは明らかに科学的である。そして生活の効率的なあり方を追求している。周囲との協調よりは，自分の個性の追求と実現により関心を示した“生きざま”を志向する。より端的にいえば，自分に合った生活，自分を生かしたり伸ばしたりの生活，自分に損をもたらさず，得をもたらす生活を実現し，展開していくための知的配慮の合計ならびに組み合わせということになろうか。しかもそこで依然として重要な部分を占め続けているものは，高齢になった際の生活を支障なく過すための家庭内施策なのである。

というのも，若・中・壮年齢期の生活を生き生きと過さんためには，もろもろの心配からある程度までは開放されてあらねばならない。とりわけ老後生活の不安からは解き放たれているとよい。老後生活の不安から完全に自由ということはほとんどありえないことではあるが，かといってあまりに深刻に不安を感じているようでは，自分を活達に表現する日常は望むべくもない。つまり老後への備えがなくては，いま，とりわけ中年・壮年，そして熟年・実年の生活の高揚または充実が期しがたいということになる。生活設計は将来のためだけでなく，それがより多く将来・老後の生活に備えるためのものであったとしても，そのまま現在の生活のためにも役立ってくるのである。将来と今と一つにセットしての効果が発揮できるところに，生活設計の妙味が発見できるであろう。というのも，人間の生活は各年代ことごとく一つの流れとして連続の関係にあるからである。

生活設計というと，「とかくお金のことばかりいっていて……」との批評を受ける。これは批評する方が間違っている。古来，そして今後とも生活設計の主題は，経済問題なのである。仮りに最近随所でいわれるように精神的・人間関係的さらに時間管理的な面での生活設計があるとしても，それらは経済的な生活設計があっての上のことで，経済的な生活設計を基盤としての設計部分ということになる。それほど現代生活では経済面が優先しているのである。

お金だけで人生全体が幸福に過せるなどと考えている人は，今どきありはしない。「お金が大切」という発言を，「お金だけ大切にする人生」と置き換えて受け取ったところに，すでに“お金亡者”が顔を出している。世間にはお金を持てば持つほど，その生きざまに穢さが出てくる人がいる。しかしおおかたの者は，お金を持つことによって，きたなく生きることから身を躱せる。お金は世俗的汚れから身を護る防御膜となる。働いて得た正当なお金ならば，十分に心識を高める役を果たすであろう。

お金は，したくない仕事をしなくて済ませる。それは物心両面に亘って結構なことなのである。お金を手にして堕落する者は，お金に不足すればより堕落する可能性を含んでいる者なのであ

る。逆にほとんどの人は，お金を得ることによって“ゆたかさ”が出てきて，ゆとりも生ずるであろう。「神を信ずる者は，富裕階層に多い」の諺は，社会を洞察した鋭い観察結果を示しているとしてよいであろう。この点で現在中高年は，問題点を持っている。かれらは故意にお金を軽視する習性を身につけてしまっているからである。そのくせその必要性は身を切られるほどに痛切に感じている。感じているだけで，素直にはそれに従えないのである。この点で現在の若者には，一日の長がある。すくなくも経済問題に関しては率直である。率直であるから改善され，向上もさせられる。上手に指導さえすれば，若者の方が生活設計を見事にこなすであろう。若者の持ち家率が中高年より高いのは，なにも若者が経済的により恵まれているというだけではなくて，マイホームや大型レジャーに向けての生活設計の上手さにもあるのである。経済問題をごく自然に前面そして全面に打ち出すからである。

老後生活をゆたかにすごすために，より多くの友人を作っておくという人がいる。お金は目減りするが，人間関係は目減りしないと。本当にそうだろうか。友人も転居して遠く去っていったり，死亡したりもする。生活水準が将来大きく掛け離れると，友人の縁も途切れがちとなるであろう。友人関係や人間関係といっても，けっして固定・単純なものでなく，むしろより複雑なものであろう。まして老人になってからのそれは，老人の我執や老醜が出てきたりして，しばしば紛糾を生じさせたりするのである。

あらゆる生活設計は，家庭内民主主義で行われなければならないであろう。夫も妻も，その子女も参加して，相共に検討と討議に加わらなくてはならないであろう。参加と発言の機会を持たせることで，実計の実態を知らせつつ，そこでの責任を分担させるのである。相互の立場や考え方が理解できて，ただ単に生活設計が成功するのみならず，家庭そのものの健全性が蘇ってきたり，強められてきたりもする。とくに子女が家庭内で無理を両親に強要するがごとき行為は，急速に減ってくるとのことである。家計と家庭の実態を子女に知らしめることは，一向に親の恥とはならないであろう。これを恥視するところに，昭和一桁とその前後の精神的欠点と限界がある。

生活設計を過度に高い行為と解しても，捉えてもならないであろう。これはそれほどの大事業でも，難事業でもないのである。漠然としたものならば，昔からあったほどのものなのだから。ただ長期的な慣習化へ向けての努力が求められるだけである。“だけである”とはいうものの，それはそれなりに苦を伴う。しかし生活設計を怠った揚句の，老後生活苦に較べれば，それは小さな苦労といえるであろう。なんらかの形で，合理的人生をめざす人ならば，これからの社会で生き抜いてゆくためには，緩いかきついかの別はあっても，生活設計を持つように努めるであろう。

現代は，生活をめぐってもあまりに複雑すぎる。諸現象の変化がスピーディーすぎる。それに公的ならびに準公的な諸規制が多すぎて，衝動的生活姿勢では御しきれないのである。もっとも重大なことは，平均寿命が長くなって，現職を退いた後のいわゆる“老後”が異常に長くなったことで

ある。仕事に就いている期間中に，この長い老後のための諸配慮とりわけ経済面での諸配慮をしておかなくては，一生を通しての生活の安定・平安はありえないであろう。ここに生活設計が現代生活裡で決定的必要視されてくる要因がある。

中高年そして老年であればあるほど，持ち時間，体力，経済力，もとより気力や能力も限られてくるのであるから，この限られたものをもっとも効率よく，合理的に生かして用いなければならないわけで，その方途が生活設計の導入とされるのである。わが国でこれほど高齢化問題が注視され，重要視されているのに，世に云う“改正”“改革”などということが，高齢者・老人に必ずしも有利になるように図られるとは限らないのである。一例をあげれば，現在進行中の税制改革の内容をみると，所得減税が力説されてはいるものの，それは高齢な老人にほとんど受益をもたらさないであろう。それどころか年金課税強化案すら用意されている始末である。そして消費税導入・創設または強化となると，これは多くの場合，生活者全員に及んでくるから，高齢者・老人・年金生活者の生活を，それだけ追い込むことにはなるであろう。ここで生活設計のあり方としては，公的保障をはじめ公的諸問題の動向に十分配慮を行った上でのそれでなければならないとなる。

3　中高年の公的努力と自助努力

わが国で現在使われている“自助努力”という文言は，もっぱら公的努力との関係において意味内容が把握されており，具体的には社会保障の及ばない部分，社会保障では足りない部分を補って生活の保全を図る，経済的保障の至らないところを自力で埋めていくとなるのである。公的保障と私的保障と相対して置いた場合の，この私的保障の達成・強化・補充・補強に向けての諸努力の総称をここでの自助努力とするのである。

しかし本来の意味と内容からすれば，自助努力にはかかる消極的な面だけではなくて，実は積極的な要素も含まれている。それは破綻の生じない前の生活防衛努力であるとともに，生活そのものの向上を企図しての積極的努力でもあるであろう。いうなれば生活改善努力であり，生活向上活動となる。“守り”のみでなく，〝発展〟なのでもある。そしてそれはよりよい状態に向けての前進を意味するであろう。進歩・発展のうちに生活を安定させていく，生活のよりよい充足をもって諸問題を押さえ込んでいくとしてもよい。発展・向上と充実・強化の道を歩くことそのものが，生活の多くの危険を圧縮させたり，減少させたりするであろう。つまりここで述べたような消極面と積極面の二つを兼ね備えていて，そこで始めて“自助努力”の本格的把握ができたことになる。

自助努力
- 消極的内容
  - 公的努力で落ちた部分を補う＝補足
  - 公的努力に上積みして一層の充実を図る＝補完
- 積極的内容
  - 生活危険の自力による除去ならびに回避＝防衛
  - 生活そのものを強化そして向上＝前進

中高年，熟年や実年の年齢層に向けての公的努力としての社会保障をめぐり，その「流れが変わった」とは，ここ数年のわが国で聞かれだしてきた言葉である。もはや国民は，年金であれ医療であれ，これ以上の負担の強化，つまり社会保障諸料の引き上げや，諸税の強化には耐えられない段階にきている。負担の限界にありながら，人口構成も高齢化はまだまだ促進されて，従って負担強化は避け難いであろう。負担強化も度が過ぎると，国家的規模での生産意欲減退，生産性低下を結果することになるのである。同時に“日本人働き過ぎ＝稼ぎ過ぎ→貿易黒字拡大＝貿易摩擦深刻化”といった一連の理論の筋を追って，国際的視野での問題を生じさせかねないのである。なにせ働かなくては生きていけないほどの過密社会なのだから。

そうなると社会保障の諸部面での改正・改革となって，その内容は給付水準の抑制，給付内容の整理・統合，給付範囲の調整，給付体系の組み替えと合理化などとなる。それは従来のような負担軽減や給付拡充を意味する福祉論ではなくて，これからは負担の大幅な強化を避けるための福祉の停滞・抑止となるであろう。このような動きを指して，ここでの“福祉の流れが変った”なのである。一見，改悪のごとくに思えもするが，制度防衛とか，制度の維持・存続という点よりして，これはまさしく“改正・改革”とされるわけである。

中高年に間近かに迫った老後の生活維持・持続に対し，一方では国や企業の年金で備えるとなれば，それは各種の社会保障年金であり，各社ごとの各種企業年金ということにもなり，他方では高齢者雇用の促進を図るとなるのである。ここで云うほど高齢者雇用の促進を図るとなるのである。ここで云うほど高齢者雇用の促進がスムーズに運ぶであろうか。世間ではよく「第三次産業で高齢者を」と主張したりするが，その第三次産業にはすでに男女雇用均等・平等を獲得しつつある女子労働力が大量に導入されて，待ち構えているのである。当然この女子労働者と高齢労働者が職をめぐって対立・対決する局面もみられだすが，ここではほとんど高齢労働者の勝ち目はないであろう。今はまだ高齢にして男子労働者が第三次産業のところでも優勢で押し気味であろうが，将来はそうはいかないと予想される。それというのも，第三次産業こそ，その多くはセンスを豊富に必要とするものであり，近代的・現代的さらには将来展望型・未来型の美意識や審美眼，発想・着想・着眼などを欠かせないものなのである。これはどうみても若者の特権的所有に帰するものであろう。残念ながらこれらの高齢者の持ち合わせは非常に少ないとされざるをえない。

雇う方の側としては，高齢者をめぐっての労災事故多発も考えておかなければならないであろう。新しい機器，先端的なメカの導入は一段と促進されるものと思えるが，ここでも高齢労働者は苦戦する。なかなか飲み込めないし，飲み込めても若い者ほどには十分に使いこなせもしないであろう。そもそも飲み込まんとして努力している姿を若い者，後輩，部下，女子従業員などに見られたくもないはずである。修得へ向けての努力・勉強が消極的となり，よって若年層よりは遅れてしまう。このことがそれだけ高齢者雇用を困難にしてしまうであろう。

生涯教育に大きな期待を置くことになる。生涯教育といっても，年齢の各段階に応じて内容も，あり方も違ってこよう。若〜壮年期のそれは，もっぱら視野の拡大とセンスの磨きに力が注がれるであろう。とりわけ国際的進出と問題処理のため基礎的能力の育成・涵養が大切となる。同時に技術面での錬磨と新技術の吸収に向けての教育は，とくに忘れてはならない部分となる。

壮・中年期ともなると，いよいよかつて自分が修得した知識や技能が時代遅れとなってくるから，新しいそれらの吸収が急がれるであろう。またこの時期には管理職の一環にも着くことにもなろうから，部下や外部の接触者を管理・統制する力が必要となって，それへ向けての一連の教育がなされなければならないのである。この段階では，人材の二極分解もありうるであろう。一は，ラインに属して管理者への道を歩みだす少数一群であり，他は，プロフェッショナルへの道にして，ある仕事の専門家的地位に向けて，技術や技能が磨かれていくといった生き方である。いずれにしろ両者とも，趣味的な教育では役に立たなくて，本格的な教育の連続でようやく歩き続けえる道なのである。この二つの道にそれぞれ属する者以外の，“その他の人”“一般の者”と呼ばれる多数集団があるとはいわれるが，これとても程度の差こそあれ二つの路線に沿っての教育に努めるべきであることは間違いない。

中〜高年の段階では，その者，自分をできるだけ労働現場で長持ちさせるための教育に加え，高齢退職後，老齢引退後の生活をできるだけ円滑そして間違いのないように過させるための諸々の教育が必要であろう。それは年金制度や医療保障の知識であったり，税金，財テク，趣味，教養などと幅広い領域に及ぶであろう。それは生産能力の育成・リフレッシュに関するところもあるが，老後生活を楽しく，生き生きと，そして間違いなしに過ごすための基本的知識の授受の教育という要素を豊富に含むわけである。

主として企業内での，時として地方自治体が行う教育が真に生きてくるためには，実は終生変わらざる各人による自分向けの教育，自主教育が同時並行的・併行的・平行的に遂行されていなければならない。むしろ自主教育があっての上の企業内教育，地方自治体教育ということになろう。そしてもう一つ，ここで注意すべきことは，それが単なる娯楽とか面白半分，暇つぶしのような程度のものでは役に立たないということである。それこそ“楽しむ”という目的すら，長期にわたっては実現されない。教育と名が付き，そう呼ばれるからには，それは相当量の“本気”の要素を求めてやまないのである。

さて高齢退職，老齢引退して本格的老人となって，本当の老後生活に身を置くようになったところで，「まだ教育が必要なのか，教育をしなければならないのか」の問いかけがでてくるであろう。答は「もとより教育は絶対に必要である」。なぜかというと，いかなる年齢にあろうとも，生活者としては現役だからなのである。現役は，現役としての教育を，常に，絶えず受けねばならない。そこには老化防止の機能もあるし，教育をみずからに課していることで，他の世代とりわけ若い世

代との意識の断絶を埋めることができるからなのである。老人の孤立と孤独の主因は，自分自身への教育不足なのである。

社会保障が現中高年にとって十分に生活保障をするものでなくなれば，あとは自助努力の促進ということになる。自助努力の展開に大きく期待をかけるという政策転換に際し，そのこととの関連で公的努力側に配慮されなければならない条件が生じてくる。それは社会保障の本来的機能の一つ，“お家芸”と俗語ではいわれもしよう所得再分配・所得再配分をめぐって，けっして過度になってはならないということである。中以上の所得ランクに属する者は，あまり大幅な所得再分配政策を採られると，ただでさえ世界最高率の累進課税で苦しんでいるわが国の人々にとって，とても耐えられない社会保障負担となり，その上に自助努力の遂行を求められても，“できない相談”となってしまう。これが嵩じると人々が“やる気”を無くし，老大国病に国全体が落ち入ってしまう。ただ所得再分配にもそれなりの意味があって，社会的不平等を是正する方向でなら是認されよう。①男女性別間不平等，②所属制度間不平等，③老若年齢階層間不平等，④前世代・現世代・後世代などの世代間不平等，⑤職種間不平等，⑥地域間不平等，⑦国籍間不平等，これら不平等の是正に所得再分配政策が生かされて，それが場を社会保障・公的努力に借りて行なわれるのなら，そしてそれがまた許容範囲の中のものであるなら，国民的コンセンサスは形成されよう。⑧貧富間不平等というのもあるが，①～⑦の不平等が解消・縮小されれば，⑧の不平等のおおかたは減じてくるのではなかろうか。

「自助努力をしろといわれても，できない階層・集団があることを忘れている。このできない部分こそ本当に自助努力が必要とされるところで，ここをどうせよというのだ。どうしてくれるというのだ」という反論が絶えずでてくる。それへの答が，基礎的部分を分担する公的努力，経済的保障の基本的部分としての社会保障，扶養・扶助・救助・救済といったような社会福祉や社会扶助の存在ということになる。別に人間関係管理や健康管理または精神管理などの諸措置（それは公的に行なわれたり，準公的に行なわれたりするし，中央政府または地方自治体によって推進されたりもするであろう）の存在である。

現中高年齢層に欠けているのは，自信とトライ・挑戦する姿勢である。それが“コンピュータ恐怖症”や“メカ嫌悪症”などとなってでてくるのである。なんと若干の時間をかけてこの面の技能教育を施した事例によると，十分にマスターできたし，ものによっては若年層よりも上手・正確に技能修得がなせたとのことである。最近では，肉体的能力も頭脳的能力も，年齢が高まるにしたがって低下するとはしないのである。そして若干の低下なら，それこそ簡単なメカの導入・活用で十分補えるとの報告もある。要は機械や技術への自信をもっての接触開始なのである。周囲は，社会全体はみだりに“おどかす”ことなく，“笑う”ことのないように，自粛・自重すべきである。

自助努力といっても，夫婦一体・夫婦協力で行なうことは，当然その範囲内に入る。現在の中高

年が現在の老年と生活面で協力して生きてゆくこと，これも自助努力の遂行である。しかし自分の子ども達（おおかたはまだ一人立ちしていないか，一人立ちしていてもそれほど根の張ったものでもなく，力強い生活基盤はみられまい）と中高年者が一緒に生活し，生活を共にして，そこからの有形無形の支えを自助努力の範囲内に収めてしまうことは，正しくないと思われる。現在の“子女”にして“若年層”そして“後世代”との一体的自助努力形成の名のもとに，かれらに依存し，依頼し，“寄り掛かる”，援助に類するなにかを“期待する”のは，絶対に間違いであり，達成もされないであろう。これからの若者は，年金制度と呼ばれる“制度的親孝行”を行なうのであるから，その上の“個別的親孝行”“家庭内扶養型親孝行”を望むのは，無理ということになる。そもそもこれからの（若年層の）人達の老後こそ本格的な高齢化時代となるのであって，それに自助努力で早々と準備しださなければならない若年層の立場なのだから。かくてここに自助努力とは，どこまでも個人の立場での生活自立に向けての努力展開ではあるのだが，なるほどそれは他者に頼ることであってはならないものの，ある制度（例えば互助会・共済会・組合・保険など）を形成そして活用して，“相互的自助”“互助的自助”を達成することは，これぞまさしく自助努力，むしろ真の意味の，現代的な自助努力そのものとされるであろう。一本の木がそれだけで立っていても自立自助，つまり風雪に耐えての自助努力ならば，たくさんの木が集まって，それぞれに一本立ちをしながらも森や林を形成して立ち続け，成長し続けるのも，これまた自助努力なのである。二本，三本と一つに集められて括られ，寄り掛かり合って立ち続けるのも，なるほど立ってはいるものの，それでは自立自助とは言われないし，自助努力とはされないのである。各一本ずつでは立っていないわけだからである。

4　中高年と企業保障の関係

わが国では，昔から良い意味でも，悪い意味でも“経営一家”の思想がある。“経営協同体”とか“経営圏”とかと表現されるところの欧米経営学的表現のものとは，一見共通しているようでいながら，やはり基本的部分で相違があるように思われる。わが国のそれは，どこまでも集団主義社会内での特殊な人間関係のあり方や形成を示すもので，終身雇用と年功序列秩序を内蔵している。これに対し欧米型の経営協同体とか経営圏の思想では，どこまでも利益追求と利益取得のための協力関係，相互利用関係が中心であり，そこにはそう考えて行なうことの一層の合理性や効率性の達成が意図されているわけである。いうなれば“経営手法”の一種なのであるが，経営一家の方は社会的人間関係の一形態，社会類型の一種とされてこよう。ゆえにそこでは個性・個我の発揮が著しく抑えられる。

とはいえ，経営一家思想のなかには，温情そして恩恵に根ざした福祉・福利も豊富に内在する。それは企業内の中高年にとっては，まことに有難いものであろう。しかしそれも徐々に若年層向け

福利厚生制度・施設に変わりつつある。企業内において中高者の扱いに変化を生じているのである。まず給与体系が年功序列給から高原型賃金へ，ついで柳型賃金へと変化をきたしている。加えて配転，降格，出向，賃金や手当のカット，窓際からベランダ族へと追い詰められる。もとより第二給与体系の導入などの手法を用いて，退職金や企業年金の減額を図ったりもする。ただ団体保険や企業年金の制度の導入で，突然の従業員死亡による遺族生活保障とか，高齢退職後の老後生活の経済的保障に尽くしてもくれているが，この退職金や企業年金すらが“(若年優秀労働力の) 呼び込み，(高齢老化労働力の) 追い出し”機能発揮とくるのである。高齢者・老齢者の円満退職をも狙ってとなると，有難がってばかりもいられないのである。

中高年対象の企業内経営政策の重点は，一は健康管理，他は能力開発ならびに発揮に向けての労務管理となるであろう。企業内教育が一段と本格化しよう。企業内失業者を出さないためにも，ましてロボットの導入で過剰となった労働者の“生ま首”を切らないようにするために，とにかく企業内のどこかで有効に働いてもらえるために，能力・才能啓発に向けて教育を施していくわけである。これからは失業問題が大きく社会問題化するであろう。ⓐ女性の大量進出による高齢者失業，ⓑ企業内でも高齢化が生じて，そのために定年が延長されての高齢者の企業内失業，ⓒ構造的不況産業より放出される労働者の失業，ⓓ技術革新に追いつけなくなった労働者や余ってしまった労働力の企業外への放出による失業，ⓔ労働価値観が変化して，働きたがらなくなったための自発的失業。このうちのほとんどが高齢者・老齢者の失業となって，まず現われてくる。しかもそうなりながらもなお，社会全体としてみても，高齢化現象の深刻化は，そのまま生産能力や効率の低下をもたらさずにはおかぬであろう。

高齢化現象は社会的に深刻化していくと，家計貯蓄率は今の20%から，昭和100年頃には10%程度へと低下するといわれている。つまり高・老齢者が増えて，過去の貯蓄を年金として費消していくからである。そしてとにかく65歳以上の者が25%（4人に1人）となるとあることよりして，いよいよシルバー産業の本格化の時代となるであろう。新しい産業文化の夜明けであるが，それは裏返せば在来産業の“足ぶみ”を意味してしまうかもしれない。そこに高・老齢労働者の新しい使い途，新規雇用が若干ながら見込まれる。「シルバー向けの商品開発と販売促進は，シルバー人種をもって当たらすべし」，“シルバー戦略はシルバー人材で”となってくるわけである。今後，50兆円市場とのことで，まさに最大・最後のマーケットとしてのシルバー・マーケットとされている。

シルバー・マーケットの内容は，まだまだ未定であるが，そこには医療産業，医療そのものの提供と医療機器，医療をめぐる諸サービスが中心となろう。ついで老人向けレジャー，それは老人能力保全を求めるレジャーはもとより，レジャーそのものから文化教養的な部面まで拡大していこう。老人村・年金村の建設や別荘地の開発，そこまでの足の確保，さらに安全確保・警備保障なども考えられる。日常生活における老齢者向け金融活動，財テク，さらに財産管理へと拡大してい

く。もとより教育・情報産業は必要となる。高齢者向け教養講座，カルチュア・センター，出版，通信，会話そして会食。映画・演劇，送迎，信仰・宗教関係，大きなところで旅行・海外旅行や世界一周，その他グルメ，朝晩のご飯や食事出前……。比較的安定的で，ただし高度の安全性確保を要する産業ということになろう。相互に関連し合うことも強い。

シルバー産業が発達し，隆盛となってくることは決定的であろう。そのこと自体は悪いことではない。ただ概して“弱者”としての老人対象の産業となるから，特殊の社会的配慮は欠かすことができない。①シルバー産業の商品やサービスは，高齢者が購入する。その弱味と独居に付け込まれれば，容易に騙されてしまう。そこで相談者や苦情処理係に当たる者が必要となるし，それ以前に公的監視や公的規制が必要となろう。②シルバー産業には，それなりの“温かい心”が含まれている必要があるが，いま時，そのようなことが業界人・産業人・商売屋・営業マンに望めるであろうか。逆に商品やサービスの原価に可能なかぎりの高い利潤・利益が乗せられるであろう。シルバー産業とても“儲け仕事”の一種である。下手をすると“冷たい福祉”の提供時代が来てしまうかもしれない。③人生のすべての段階が，老後までもが“万事かね”の風潮となろう。シルバー産業は，老後にお金を豊富に所有する人とのみ接触する。そこでの商品やサービスは，けっして“安め”のものではないはずで，なにせ一般的意味での生活必需品を上回る。贅沢品かセミ贅沢品のはずである。そうなると若いうちからお金を追求し，お金を貯めておかねばならない。かくてますます，人生全体を覆うところの“拝金主義”“お金最優先”の思想が強まってくることであろう。④当然のことながら老後における福祉格差が拡大しよう。格差の存在は，たとえそれが福祉をめぐって存在していたとしても，それほど悪いことではない。ただ富の公正なる帰属，生産活動成果の適正配分などがあっての上の是認なのである。そしてわが国にはこの前提条件が決定的に欠落しているのである。概して都会内で孤独かつ環境に恵まれないで生活しているサラリーマン老後者にとって，その人生全般・人生全段階で，所得取得・成果配分や税負担・社会保障費用負担の面においてあまりに不平等で，これらを考え合わせると，“老後福祉を，もっとも必要とする者が，もっとも購入も利用もできない者ということになってしまおう。

⑤私的なシルバー産業のところでの福祉販売が，提供が，公的な老後福祉に徐々に取って替わる危険がないかである。もともと公的福祉の負担が限界に達して，だからそれ以上の上積み福祉は私的自助努力でとなって，それに応ずるためのシルバー産業なのであろうが，負担の限界にある者により以上の負担の上積みができるはずはないのである。そこで考えられることは，公的福祉を削減しつつ，圧縮しながら，その分を私的福祉に肩替わりさせるとの図式になりかねない。公的に行なうより，私的に行なう方が効率的で安くつくというのなら，大賛成ということになるかもしれないが，そのかわり安心感や信頼度で劣ってくるであろう。公的な老人福祉施設は，よもや倒産も破産もしないであろうが，シルバー産業にはそれがある。いやむしろ福祉産業・福祉性産業は一般の産

業より，より倒産・破産しがちなものなのである。

⑥シルバー産業から商品・サービスつまり老後福祉を購入するためには，若いうちからお金の追求を行なって貯めておくか，高齢時に入っていずれは子孫・子女に残すべき遺産を取り崩していくか，のいずれかであろう。遺産を減らしつつのシルバー産業福祉の購入・費消となると，ますます子女との縁は薄くなり，場合によっては縁が切れてしまうかもしれない。実はこの方向はより近代的で適正とされるものではありながら，わが国の旧来からの社会観念・通念からすると，なかなか受け入れられない傾向の発生である。遺産相続をめぐっての，遺産額・量に関しての親子軋轢・摩擦が生ずる事例が考えられる。

⑦老後生活に向けての公的福祉，私的福祉，自助努力と関わってのシルバー産業。これらがある程度の水準まで達すれば，それで国民の老後生活の保障も，また幸福も達成できたと，そう簡単にはいかないのである。これを大きくとり囲む社会環境が整っていなくてはならない。たとえばシルバー産業によって医療提供施設ができたとしても，若者と違って足の弱い老人にとって，そこまでの安全な“足の確保”がなくてはならないのである。若者ならば，自分で車を運転したり，鉄道やバスなどの利用もありうるであろうが，高齢者・老人では，余程交通機関という交通環境が整備されていなくては，十分な福祉の利用・活用とはならない。“足”までもシルバー産業でとなったり，またシルバー産業の利用率が予想より下回ったりすると，それだけ価格も高騰してしまうことになる。

⑧老人に一番求められているものは，生きがいと愛情であろう。だからこそシルバー産業は“ニューライフ・ビジネス”と自称して，けっして単なる商品販売者やサービス提供者とはいわないのである。しかし商売・営業として生きがいや愛情を売るということは，きわめて難しいであろう。ここに大きな問題点がシルバー産業にはある。便利と愛情の交換となってしまう場合も少なくない。例えば，一戸建ての家に老人が住んでいるよりは，清潔なマンションの一部屋の方が好ましい。大都市を離れて住むよりは，都市内で病院・買物・催し物見物に便利な方がより好ましい。その住居を提供するのもシルバー産業である。しかしそこではペットは飼えないであろう。便利さは手にされるものの，愛情は欠け落ちるであろう。便利で淋しい老後となろう。

5　中高年の家庭生活と社会生活

生活設計は，家庭内民主主義でこそ成功するものとは，既に述べた。そして中高年の生活では家庭を大事にしなければならないことも自明の事であろう。男性・夫にとっては，自分の老後と死までをも世話し，看取ってくれるのが妻であって，妻を欠いた老後は，おおかた悲惨となるはずである。その点女性・妻の側は強い。とはいうものの今度は男性より一層長い老後である。それへの準備は女性の独力のみでも，これまたなかなか難しい。そこで人間は，最小単位では夫婦互助，最大

単位では社会保障での国民互助となるわけである。しかもその中で互助的自助が正しい姿勢とされだしてきている。相互扶助と自立自助を一つに組ませたものとしての互助的自助となるのである。

高齢期に入り，老後が近づくにつれて，土地と家のローンの整理は必要である。そして夫は自分の後まで残って生き続けるであろう老妻への配慮，とりわけ経済間での配慮を忘れてはならない。家庭の中での“子ども本位”のあり方は好ましくない（親本位のあり方となっても，もとより好ましくもないが）。子どもに過度に費用を投入しながら，より過度の期待を荷わせてはならない。子どもへの親の期待で苦しめたり，人生を制約してもならないであろう。第一，子どもにとって，子どもへ費用を掛け過ぎた結果の“親のみじめな姿”を見るのほどみじめはないであろう。くれぐれも老後を子どもに頼ることは避けるべきである。

家計貯蓄率は，世界中でもっとも高い日本である。しかしそこからローンを差し引くと，さしたる金額は残らない。それが老後の生活資金となるのであるから，老後生活準備といっても程の知れたものと，まずもって知っておこう。しかもそれは，多かれ少かれ，インフレで目減りしたり，デノミの危険にもさらされているのである。そこで財テク。だがお金ならびにその先行きに不安があるから財テクに走るのでありながら，その不安なお金の運営・運行・運用に関わっての財テクとなると，どうやら理屈が合わなくなる。財テクとは，所有するお金の二割程度まで，それも遊びの心というゆとりを持っての行動であるべきである。お金の前途に不安を感じての，そのお金を動かすことによる財テクでは，まず成功したり，上手にいくことは少ないであろう。これを語呂合わせでいうと，「財テクとは，テクテクと地道な努力で……」となるのである。しろうとに真の財テク路線などないとして，その上で高年・老後に備えての諸般の努力と知るべきである。

高齢・老齢生活のところでは，友人関係の形成・拡大，保持・永続こそがもっとも重要とされるのは，頷ける。お金はインフレで目減りするが，友人は目減りしないと。しかしこの友人といえども死去という形での目減りがあるのである。おおかた友人は同世代の人達で，同時平行的に高齢化して，老後に入ってポツポツと欠けだすからである。この友人達との友人関係は，その時点で経済力や経済水準がやや揃っていなくては，持続できまい。というのも，普通人・一般人・平凡人の間では，友人との経済面での落差が一定限度以上に大きかったら，友人関係ひいては友情そのものも持続しがたくなるのある。生活のあり方が相互に大きく開いたり，変わったりしては，友人付き合いも上手くはいかないこととなる。

高齢時・老後は，持ち時間そのものは少ないものの，レジャー，余暇は豊富である。そこで趣味に生きて，趣味を楽しむとなるが，Ⓐ即物的にして，費用の巨額化するレジャーは，これは向かないであろう。なかなか高齢者・老人では，体力的にも，お金の点からもやりきれまい。Ⓑ大勢でやるのでなくてはできないレジャーは，これまた向かないのではないかとされている。なかなか大勢は集まりにくいうえに，高齢者・老人特有の感情対立などが発生し，激突しがちだからである。Ⓒ

文化的であったり，教養的であるレジャーは，これはふさわしく，長続きし，適するものとされている。頭脳と心情のトレーニングにはなるが，体や筋肉のトレーニングにはならないから，この点は別のことで補わなければならないであろう。ただ文化的・教養的レジャーは費用があまり掛からないし，場所もとらないし，利害対立もないし，周囲に迷惑を及ぼさないし，そして他人から敬意を集めるものとして，けだし老境では適切なレジャーであろう。

「愛される老人となろう」と，しばしば各団体・各運動のスローガンなどにでてくるが，これは無理な注文ではなかろうか。どう考えても老人は“愛される”対象にはふさわしくない。それほど可愛らしくもない（当然！）。むしろ“尊敬される老人”こそもっとも好ましいあり方であろう。豊富な人生経験と長い人生行路の蓄積としての老人の今の姿とあり方には，もっとも尊敬に値する“なに物”かが集約・圧縮そして凝結されているであろう。その人生観の中に社会的広がりと風雪に耐えた要素があるかぎり，若者は必ず老人の人格と存在を認めるであろう。わが国の現代の老人にもみられがちな“居坐り”“むしり取り”“せびり”“物乞い”“甘え”の生きざまでは，尊敬はおろか，愛されも，認められもしないであろう。周囲の犠牲の上に安住したところの“ただ生きている”では，いずれは老若利害対立の中に老人が敗退していくであろう。とりわけ社会保障で生活の底固めをされたその上に互助的自助の生活展開があってこそ，尊敬に足る老人・老後となるのである。かかる“生きざま”の上に“死にざま”が相応して形成されていく。

高齢者・老齢者は，みずから“もっともしたいことは何か”と，ここで問うてみるべきである。それがまた今を最高度に充実させていくであろう。そしてそれは人生のたそがれに際し“名誉ある撤退”をなさしめるであろう。それなくしては“天国へのパスポート”の入手は不可能で，逆に場合によっては“地獄への回数券”を手渡されてしまうとのことである。しかしだからといって“死”などは，みだりに話題にしたり，特別の関心を持つべきではないともいわれるのである。「未知生，焉知死」（未だ生を知らず。焉んぞ死を知らん）。この時期にはまた宗教とか信仰とかにも，一度は目を注ぐべきであろう。

お金持ちほど，それに高齢になればなるほどお金に汚くなり，えげつなくなる傾向があるのは，残念ながら事実のようである。それにわが国の経済機構・構造は，貧富の懸隔はますます大となって（資産面でとくに），もはや縮小・約める（つづめる）ことは不可能である。上流階級・資産階級・富裕階級はそちら側で勝手に生きればいい。どうせ日本国では根本的な事柄は直りはしない。われわれ庶民階級・一般大衆・勤労階層はこちら側でお互いに協力し合い，われわれだけでできるだけ上手に，合理的かつ適切に生活していこう。生活の具体的内容でも，生活意識の面からいっても，わが国では社会的に二極分解しつつある。これを生みだしたのが資産保有の格差，土地政策の失敗，票の重みの格差，税負担の不平等，国家援助や補助の偏り，職業や地位の世襲的傾向，官尊民卑の再登場，そしてこれらの深刻化の是認と放置。わが国は建前で民主主義国，本音で非民主主義

国。だからこそ庶民側での互助的自助であり，社会保障でいうところの所得再分配も“階層内所得再分配”なのである。

老人は，老人グループ内で，そこに属する老人同士が面倒をみあうべきである。「老人の世話（病気または老衰の）は老人（健康または健常の）がまずする」となり，男女の社会的地位と扱いが平等化するにつれて，「女性の世話は女性がまずする」ともなり，女性は保護される存在ではなくなり，労れる側だけでは困るのである。ここにも女性間の互助的自助が必要となってきて，これらそれぞれの，随所・随時の互助的自助の総合の上に，国民的規模での互助的自助が誕生・展開されだすであろう。

6　中高年の新人生観と今後の社会

この世の中で大いに，ずば抜けて面白く，躍動かつ飛躍を経験し，味わおうとしても，それは期待通りにはいかないであろう。あまりに“世紀末”的になってしまったからである。そこで人々は平常・正常の発展向上をたどることにおいてのみ，常識的な喜びを手にすることができる。冒険の時代，成功と危険に挑む時代は過ぎ去って，第二の，形の変わった，ある種の，新しい封建制度の時代と，現代は性格把握されている。やたらと面白いこともない代わりに，それほど悲しいこともないはずである。どれほどの楽しみとてないが，さしたる悲しみにも遭遇しない。無感動で，安定の時代である。一般人とて“食うに困る”ことはなく，さりとて“財を成す”可能性はゼロに近い。ただ限りなく高齢化し，老後は長くなっていく。長い人生に抑揚が少ないからこそ，長持ちするのであろう。

価値観は多様化する。生活がそれにつれて多様化する。それでいてマスプロとマスコミの力によって，生活は規格化され，格一化されてもいる。食品にも，衣服にも，レジャーにも，教養にも，なんと生活保障にも大きなところから，大きな力で方向付けされているのである。曰く自助努力，曰く高齢化対策，曰く公的年金期待不可能，曰く個人年金，曰く財テク商品……と。このような趨勢裡での中高年の生活設計なのであるから，なかなか困難である。老人になると個性が出がちである。個性的生活をするほどの財力はなく，体力と気力に欠け，マスプロとマスコミ，それに悪徳商品に乗せられたり，押し切られたりもしがちである。庶民の老後は「泡だってくる」。冷静であれ，理性的に生きよ。助け合いながらも個性的生活を人生最後の段階で試みてみよ。だからこそ新人生観を早い段階から養なっておかねばならない。今後の社会を見透しておく必要があるとなる。

高齢時ならびに老後を正しく，ゆたかに，楽しく，つまり幸福に過そうと考えても，その時点でだけ努力すれば希望が叶えられるというわけにはいかない。もとより努力をすれば六割強の可能性はあるのであるが，なにせ人間とその社会は，過去の生きざまとあり方を負い，引きずっているの

である。従って若・壮，低・中年齢の時期から正しく，先見性をもって行動するよう努める必要がある。例えば老人が退屈せず日日を過ごせるためには，周囲の自然環境や社会環境の整備と充実は欠かせない。ところが人々はサラリーマンとして企業に奉職・在職している時期で，企業の方針に遅疑遅滞なく，むしろ積極的に，あまりに忠実忠誠に従い，そして応じて，自然環境や都市空間を壊していく。そこに営利施設を建設して，それを運営する企業からなにがしかの上積みの給与その他の配分を受け取って，これを無上の喜びとし，生きがいとすら思うに至る。そしていずれは定年退職，高・老年になって家庭に引き籠もり，散歩に出だす場所の皆無をかこつのである。ところがなんとそのようにしたのは，かつての自分達集団だったのであり，つまり自分で自分の将来の生き方を壊し，幸福を崩してしまっていたのであった。サラリーマンであれば企業の方針に従う以外になく，抵抗の仕様のなかったことは肯けるが，それにしてもあまりに積極的な協力参加であり過ぎたし，調子に乗った乱暴な活動のやり過ぎであったのではなかろうか。かくてわが国の前途は“公害汚染国家”であり，“はげ山国土”であり，“コンクリート・ジャングル”となるであろうと，海外の人々の顰蹙を買っているのである。天に向かって吐き出した唾は，時間こそかかるが，いずれは当人に降り落ちてくる。少しは国民全体として，老後の生活環境の保全を考えてみるべきであろう。老後を襲う二つの危険，“食えない”と“退屈”，食えないはその時になればなんとか社会的に克服・処理はつくものの，退屈は急には解消できないのである。

最近，急に注目を浴びだしてきた“海外年金者村”がある。日本より土地も安く，住居費も掛からず，食品も低廉，自然豊富，生活の万事が安くて楽に過ごせそうな海外のしかるべき地帯に，年金受給者が集って，一つの日本人集団地帯を形成し，協力すれど干渉せずの生き方を展開して，日本での老後生活よりもゆたかに暮らそうとの案・アイディアである。数年前にこの考えが提案された時には大変な不評であった。「邪魔になった老人を国外に追放または追い出し，あるいは捨て去るつもりか！」と。しかし数年経っての今日では，真剣に取り上げられて，検討の俎上にある。ここでこの案が成功するためには，絶対に失敗をしないためには（失敗をしたらそれこそ悲惨で，人道問題），次のような諸項が配慮されておらねばならない。しかもこの配慮は長期に渉って。

①最終的には，いつでも国家・母国の救助が及びえる体制があること。

②一定の人数の高齢者・老人が集まって生活すること。つまり集団の規模が一定以上でなくてはならない。百世帯以上はほしいのではなかろうか。

③ある程度のゆたかさのある年金受給世帯であること。海外生活ではお金の有無が決定的であり，日本に居る時のような親戚・友人・近隣からの金銭的協力は一切期待できないのであるから。もっとも日本に居てもこれからは期待できなくなるであろうが。

④過去に一度または数度は海外生活の経験のあること。せめて長期の海外旅行をしたことのあること。そして日常会話程度の語学力が身に付いていること。

⑤車の運転をはじめ，国際的に通用する趣味，食事・衣服その他で国際感覚があること。逆に云えば“脱日本感覚”に耐えられること。ただしそのようなことは，思うよりもはるかに容易である。海外諸国の方がわが国よりも，余程生活尊重の生き方をしているからである。はるかに生活面で先を行っているからである。

これから述べることこそがもっとも重要な事項とされるであろう。

⑥一定以上の健康体であること。少くも住みついてすぐに病気というダメージを受けるようであってはならない。

⑦年金生活者の村・集合地帯を企画・作成する当事者（大企業，大不動産業者・デベロッパー，行政当局など）は，必ずその中に，または周辺に，医療機関・診療所そして医師・医療関係者の配備や有無を確認しておかねばならない。

⑧最終的に寝たきり老人，要介護老人（とくに最悪の，独居老人にして，そしてこの状態におちた者の場合）になった際の対応を，当人または送り出す側においても考えておくべきである。

⑨風光明媚で気候温暖，自然豊富でレジャー最適というだけで，年金村設営の場所を設定してはならない。俗にも云われている「年をとったら生活便利な都会に住め」は，ここでも生きてくるのである。買物は便利，スーパーやデパートも近くにあり，車以外の乗り物も利用でき，大病院・診療所が備わっており，金融機関が身近かにある。なによりも観劇，コンサート，催し物，図書館，情報機関，美術館，博物館，政府ならびに地方自治体諸機関，教養取得や勉学の諸機関，レストランやスナック等々が活用できる大都会やその近隣の方が，より高齢者・老人の生活場所として適していよう。いうまでもないが若者を豊富に含んだ“人間群集”があって，そこからの刺激で若さを保てようというものである。年金者村は辺鄙な所であってはならない。田舎がいいというわけではない。さすがに日本の大都会，とくに東京都内での高齢者の生活となると考えさせられもするが，海外それも先進諸国の首都とか大都会となると，そこには高齢者や老人の住むに適した所が多々あって，生活美もあれば快適さも存し，環境善または面白さにも事欠かないはずである。

若者にとっては，環境の変化も，社会の進展も概して成長に役立ち，生活を躍動的たらしめる。しかし高齢者・老人にはそのように作用はしない。適応力を欠いて，かかる動きの中で戸惑いを感じ，物的にも，肉体的にも，より精神的に痛んでくる。わが国はこの点で，とりわけ老人には住み難い国であろう。経済成長のマイナス面が，中年をも取り込んで中高年のところに集中して発生しだす。そして中高年の層が厚くなればなるほど，このマイナスの総量は急激に増大するであろう。そこで「適正または適切な成長とはなにか」が問われだしてきて，ただ現役の事業家・企業家，実業人・財界人のところでは，ほとんど問われることなしに見過ごされているだけである。国の方向や方針を決定する衝にある人達は，「自分等は大丈夫，決して被害者とはならない」の自信と見通しの上に安住し，安閑としているごとくに見えるのである。しかし幸福とは所詮，全体的で，総体

的なあり方をするものだ。昔はそれでも周囲がいかに落ち込んでいようとも，自分だけは裕福で，幸福で，調子よく，順調だというあり方もありえたが，この民主主義の時代には，とくにやや長期的にとでもなると，全体や総体のあり方と無縁の個体の幸福というものなどありえなくなってきた。町中が喧噪で，自分の家だけで静寂ということは不可能であろう。車の混んでいる道で，自分の車だけ快速で走ることはできない。地域全体に空気が汚れ，スモッグが立ち込めているのに，自分だけが清浄な空気を呼吸することはありえまい。ここで人口構成の高齢化の進行または深刻化する中で，中高年そして老年者層がゆたかな生活を持ちうるためには，中高年になる以前から，すなわち若・壮年期から，もとより中高年時には当然のことながら，「年齢の高まらない以前から始めて，人生の長い期間に亘り，個としても，また全体としても，生活の向上と保全に尽くし，家庭生活と環境整備の適正化・適切化に努め続けるべきである」となる。ごく当然な要請ながら，この当然の中に真理と正常が存するものと思えるのである。

注記　遠い昔，経済学部の学生であった頃，奥井復太郎教授の「社会学」の講義を受講した。そこではふんだんに格言・諺・俗語を利用して学理が講述された。「耳や目に入り易いところに本当の真理がある。真理とは大衆的なあり方をするものだ」と，反復して聞かされた。学年末の試験問題にも，「『馬子にも衣装・髪形』，『掃き溜めの鶴』，『三つ子の魂，百まで』を社会学の立場から解説せよ」であった。本稿でも当時のそれを思い起こし，少しく俗言なども用いて論述を心掛けた。うまくいったかどうかは疑問である。

(昭和62年1月8日　稿)